

ブックレビュー 1

橋を渡る

個人の地味な生活から日本人の未来は―― ゴシップに踊らされ 直す小説 る

阿部公彦 東京大学准教授

るべし吉田修一。 とわかり、うなる。 読み進めるほどにそれが めて重要な小説的装置だ いたずらどころか、きわ ずニヤリとする。しかし、 いたずら心を感じて思わ は文藝春秋だし、作者の 今絶好調の泣く子も黙る ブンシュン」だ。版元

独立した物語の連続性も

堪能できる。というのも

術界、政界、メディア) 恋人をとりまく業界(美 見謙一郎という主人公が 新宮明良、赤岩篤子、里第一〜三部にはそれぞれ いる。彼らとその家族や 本作は四部からなる。 ュン」的なこうしたセン 細胞」。いかにも「ブンシ ウォル号沈没」「都議会 員の賄賂授受」「iPS セクハラヤジ問題」「議 三篇をつなぐテーマが 「ニュース」だからだ。「セ

の境地だ。

希有な小説だ。

語られる。おもしろいの にもかかわらず、三つの しかも、そんな宙づり感 は、どの物語も未解決の 心理描写や科白とともに ポ感と、ひねりの効いた が、作者ならではのテン の矛盾を露わにするさま が小さな綻びを発端にそ 事件」で終わること。

文春」が登場する。そう、

『橋を渡る』には

週刊

なっている、そのことが セーショナリズムが個人 文藝春秋/1800円 の地味な世界と地続きに

現代社会を描いた小説か

痛快なのは第四部である。

しかし、何と言っても

で芥川賞、'07年『悪人』で毎日 まれ。10年「パーク・ライフ」 出版文化賞、大佛次郎賞受賞 よしだ・しゅういち/8年生

著者

吉田修一

せる、吉田修一ならでは 難しさこそが物語を生む 間違ってる自分のほうが の恋人の薫子が発する言いう意味でも里見謙一郎 正しく見えるのよ」。「正 ってるの。…でも私には、 葉は意味深い。「私が間違 さえする。「正しさ」とは 自らがメディアに荷担し 瞞に直面したり、運命を もメディアの発する「正 この作品の登場人物たち されるのである。 しさ」とのかかわり方の いったい何なのか。そう 義」に踊らされ、その欺 葉から自由になれない。 三つの物語を通して実感 左右されたり、ときには 現代人はメディアの言 『悪人』を彷彿とさ

満たす。そこでは、三つ

れる存在が彼らの欲望を

られた「サイン」と呼ば

クローン技術によって作 高齢者ばかりがあふれ、 は待っている。若作りの アでもない未来がそこに ートピアでもディストピ 五年の世界へと飛ぶ。ユ を超えて私たちは二〇八 と思いきや、突然、時空

に、「なるほど!」という

の物語の「未解決事件」

後の世界にタイプスリッ 書き手では無理だろう。 なんていう力業は、並の 小説的説得力を持たせる プさせて攪乱し、しかも 人物の一人をこの七〇年 口ではじめながら、中心 つうのリアリズムの語り 答が用意される。ごくふ こ/英文学者。'13年『 する』でサントリー あべ・まさひこ '13年『文 学を 芸賞受賞。『幼さという戦略』他

χ キリトリ線